

## P-A-4 診療レポートを見据えたレポートニングシステム

尾藤 茂<sup>1</sup>, 竹居和子<sup>1</sup>, Yanan Yin<sup>2</sup>, 中平雄水<sup>2</sup>, 横井英人<sup>3</sup>, 里村洋一<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 株式会社シーフィックソフトウェア

<sup>2</sup> 株式会社イメージワン

<sup>3</sup> 千葉大学医学部附属病院医療情報部

近年、デジタル画像機器の導入が盛んとなっている。これらにはレポートシステムが付属しているものが多いが、数個の画像とフリーフォーマットのテキストで構成されているのが通例である。我々は、読影レポートを診療録記載の1ページとして捉え、画像系検査目的の視点から特化・細分化したレポートシステムを開発したので報告する。

画像系検査は、診断確定・治療経過の把握・健診などの目的によって記述すべき粒度が異なるものであり、読影レポートは目的に即した自己完結型でなければならない。これは複数の医師による連携医療や一般への医療情報の開示を考える時、簡潔に・焦点を絞って・必要十分な情報を伝達するという意味からも妥当な視点である。このためには、単なるフリーテキストでは不十分であり、必要な項目を網羅すると共に、これを構造化して、場面に応じた情報の整理(必要項目の限定的な表示)を行う機能が必要である。

我々が開発した POP-Reporter は、POP-Net Web Server (DICOM Server・画像 Viewer) と連動して遠隔読影システムを実現する Java・Web ベースの所見・診断レポート作成システムであり、使用する読影レポートテンプレートは上記視点に則り、画

像検査目的に特化させたものである。

上部消化管内視鏡を例に挙げると、DICOM Modality は ES という単一のカテゴリに属するが、健診を目的とした内視鏡検査と、精密検査や治療・処置を目的としたものでは明らかに求められる情報粒度や記述内容が異なる。同一 Modality・同一部位の同一検査項目であっても、健診目的では読影スピードと満遍なく観察することが求められるため、診るべき箇所が網羅的に列挙されている読影レポートテンプレートが要求され、精密検査では食道・胃・十二指腸などのうち、疑わしい部位に焦点を当てて、より詳細に記述していくテンプレートデザインが求められる。反面、焦点を外れた部分の詳細フィールドは邪魔になる。これらの要求に応えるため、各々の目的に適応した複数の読影レポートテンプレートを用意し、かつ不要な入力項目を読影時に読影医が任意に増減できるダイナミックな行展開圧縮制御をもつものとした。また、読影レポートの粒度を標準化しデータの再利用を行うため、JJ1017 運用コードを採用し、消化管内視鏡においては「内視鏡データの電子記録に必要な用語のデータベース (MST)」を採用した。